

『十六夜日記』「路次の記」の研究

長崎大学大学院水産・環境科学総合研究科
坂井伸子

『十六夜日記』「路次の記」について、古くは和歌の見本帖的要素から、歌論書とみなされたり、明確な旅の目的と行程、時間・空間の移動等の整合性から紀行文とみなされたりと、評価が揺れ続けてきた。近年では、それらの枠組みを外し、作品の作られた時代背景に戻しての分析が注目されている。近年の新見を受けて、本論でも、歌論書や紀行文といったジャンルの枠をいったん解体し、一つの文学作品として『十六夜日記』を考察する。歌論書なのか、紀行文なのかという観点から自由になることで、『十六夜日記』の持つ表現の工夫や虚構性、新たな文学的試みに気づくことができると考える。実際、『十六夜日記』には、歌論書や記録的要素が強い紀行文の範疇には収まらないような、創作的要素に基づくと思われる虚構や表現の形跡が見られる。それらを詳細に分析していくことで、その表現の特徴を明らかにしていきたい。

各章の概要は以下の通りである。

第1章『『十六夜日記』の虚構性について』では、『十六夜日記』「路次の記」の「宇津の山」の場面について考察を行った。『十六夜日記』の多くの注釈書では、宇津の山での記述を、事実そのままとして解釈している。しかし、伝統ある歌枕である「宇津の山」での記述は、『伊勢物語』を踏襲し、あたかも業平の東下りを再現しているかのごとく書かれている。そこで、同時代の紀行文における「宇津の山」の記述と比較したうえで、「路次の記」の表現について分析し、虚構が織り込まれている可能性やその意図について言及した。

第2章『『十六夜日記』「路次の記」の月に関する一考察』では、『十六夜日記』「路次の記」における「月」の表現方法について論じた。「路次の記」には、多く「月」が登場する。本章では、『十六夜日記』の「路次の記」における「月」の描写を全て抽出し、どのような表現形態なのかを分類し、考察を行った。その際、『十六夜日記』に登場する「月」の形や、見えている方角と京から鎌倉までの行程の位置関係についてもあわせて考察する。「路次の記」における「月」を総合的に分析することで、作者の心象と「月」の表現技法について明らかにした。

第3章『『十六夜日記』「路次の記」の和歌表現—歌枕を指標として—』では、『十六夜日記』「路次の記」の和歌の中から、特に和歌表現に注目して、分析・考察を行った。元来『十六夜日記』では、伝統的な歌枕の和歌表現について注目されてきた。本章では、歌論書や同時代の紀行文と比較し、伝統的和歌世界から逸脱した新奇な地名の和歌表現についても体系的に分析していくことで、和歌史・表現史における『十六夜日記』「路次の記」の特色・意義について論じた。

第4章『『十六夜日記』「路次の記」にみられる特異な地名詠についての考察』では、和歌の世界で馴染みの薄い地名詠について分析を行った。特に、先行歌の有無について調べ、『十六夜日記』「路次の記」の独自性に言及した。また、先行歌がある場合には、どのような影響関係が見られるのか、それらの地名詠の表現技法と文化圏からの影響関係についても論じた。

これまでの先行研究では、日記紀行文学作品である『十六夜日記』について、虚構の可能性を示唆したものは、一点しかなく充分ではなかった。また、「月」の描写に関しても、特定の表現に注目し、「路次の記」全体を通しての表現方法を論じたものは管見の限り見当たらない。また、歌道家の妻という立場から、歌枕で詠んだ和歌についての研究が盛んであったが、それ以外の和歌についての分析は十分であるとはいえない。また、時代によっ

てその評価が変化してきた『十六夜日記』について、再度本文に立ち返り、「路次の記」全体を通して本文を再考していくことは、意義があることと考えられ、その創作的要素の解明が可能になると思われる。

そこで、本論では、『十六夜日記』「路次の記」の「宇津の山」の記述に注目し、虚構の可能性について論じた。また、「路次の記」全体における「月」の表現をすべて抽出し、それらの表現、「月」の形や方位に関しても分析を行い、改めて「月」というモチーフの重要性を確認し、「月」に込められた望郷の念や阿仏尼の不安な心象を表していることを指摘した。さらに、和歌について、これまで注目されることが少なかった、古来馴染みが薄いと考えられる地名での和歌も多くあることを指摘した。その上で、その注目されることが少なかった和歌群に関して、先行歌からの影響について分析し、それらの和歌群には、阿仏尼が重要視してきた為家への思いや、為家の和歌からの強固な影響関係だけでなく、阿仏尼の文化圏ともいえる鎌倉歌壇との影響関係の可能性についても指摘した。

本論文では、以上の観点から考察してきた。取り上げた観点については、まだ十分とはいえないが、それぞれに新しい発見と課題があった。歌枕は地名であり、その景観や比定に関する分析を深めることで、環境文学としての視点も挙げられる。『十六夜日記』「路次の記」の本文における景観・風土を再考することは、「生産性」が重視される現代の課題にも示唆を与えると考える。今後は、さらに視野を広げ、史実との比較検討や阿仏尼の文化圏に関する諸問題、さらには教材という視点から国語科教育と社会科教育との融合性や、地理的視点から現在の地名・景観との比定についても考究していきたい。